

済生学舎廃校の歴史

唐 沢 信 安

(一) 済生学舎の廃校の遠因

済生学舎が何故廃校になったかについては、今日医史学上の一つの謎とされている。筆者は廃校の原因を遠因と直接的原因に分けて調査したので報告する。

第一の遠因として、日本医科大学学長であつた塩田広重は「長谷川泰の性格によるばかりでなく、北里柴三郎と東京帝国大学には、目に見えぬ対抗があり、それが遠因になつた」と述べている。

北里柴三郎は明治十九年からドイツに留学し、ローベルト・コッホに師事した。留学中師の緒方正規の脚気菌説を否定したため、東大内部の怒りは大きかつた。明治二十五年帰国するも冷遇を受けた。その時長谷川泰は「世界的大学者・北里を迎えて、研究所一つ出来ぬとは何事ぞ」と中央衛生会で熱弁を振るつた。更に明治二十六年一月の第四帝国議会に「北里の為の伝染病研究所設立」建議案を提出し、ここでも大演説を行つた。そして文部省の予算である帝国大学の伝染病研究所及附属病院設立費三万五千円余を削除して、北里の研究所である大日本私立衛生学会附属伝染病研究所を設立せしめた。

かくて文部省と東大赤門派閥の大きな反感を買つた。



済生学舎々長・長谷川泰



済生学舎廃校に大きく関与した入沢達吉東大教授

第二の遠因は、長谷川泰が京都帝国大学(三七)の設立を明治二十四年二月の第一回帝国議会と明治二十五年十二月の第四帝国議会で建議した事による。

当時泰は自由党議員として「関西に帝国大学を新設する建議案」を提出し、「東京帝国大学が

唯一の大学であるが、競風(きやうふう)が失われる。関西に帝国大学を新設すべし」と演説している。やがてその建議は容れられて、明治三十年に京都帝国大学が設立された。更に二年後に医学部が増設された。設立委員の京都府立医学校々長・猪子止(いのこしか)戈助(のすけ)は済生学舎に泰を訪ね、予算の僅少を訴えた。泰は直ちに文部省に計画変更を求め、今日の聖護院の二万坪の附属医院と七千坪の三高の隣の校地を購入する事が出来た。

後に東大教授の入沢達吉(五)は、「京都の如き程度の人口を有する都市に、官立・公立二箇の医科大学は不要である。長谷川泰に縋(すが)つて之が援助を請い、自由党の勢力に依頼して出来たものである」と批判的意見を述べている(因に、入沢達吉は泰と同郷の出身で、明治二十七年から三十年まで済生学舎の内科学・生化学を講じていた)。

(二) 廃校の直接原因である「医師会法案事件」(四)(五)(八)(九)

明治三十一年暮から入沢達吉等東大赤門派閥と長谷川泰の属する大日本医学会とが「医師会法案」をめぐる大波乱を起こした。

明治三十一年三月、長谷川泰は内務省衛生局長に就任した。前任者の後藤新平は自分のやり残した法案の数々を泰に書き残して台湾民生局長に転任して行つた。先ず泰の就任早々着手した事は「医師会法案」の制定であつた。弁護士法

に倣つて、医師の品位と権利を守るために法律を作る事が急務であつた。全国の開業医の団体である「大日本医会」が結成され、高木兼寛が理事長に、長谷川泰が理事に選出された。そして医師会法案の草案が練られた。この法案は医師出身の国会議員である鈴木万次郎を通じて明治三十一年十二月、国会に提出された。衆議院では審議の上可決されたが、参議院に廻された時、前記の一波乱が起こつた。東大の若手の教師、入沢達吉と田代義徳の二人が中心となり、「医師会法案反対同盟」を結成し、空前の大騒動となつた。

反対の理由は、東京帝大を卒業してドイツに留学を果した医師と、医術開業試験合格者や、漢方医出身の医師、並びに府県立医学校出身者の玉石混交の医師と同一の法律の下で律する事は出来ぬ(医師の差別論であり、エリート意識)より生じた反対運動であつた。また古い蘭学出身の指導者に対する反乱とも云える。この反対同盟には入沢達吉・田代義徳の外に、田口和美・緒方正規・小金井良精・浜田玄達・近藤次繁・宇野朗・弘田長・青山胤道の大家達、更に三宅秀・大沢謙二・森鷗外まで加わり、熱心に反対運動を行つた。約六十名の反対同盟の人々の攻撃の焦点は、第三条の「医師は医師会に加入するにあらざれば、患者の診察するを得ず」との項に論議は集中した。かくて、約六十名の東大派閥の反対運動のため、「大日本医会」の開業医の求める医師法案は貴族院で否決された。

長谷川泰は貴族院で独り、政府委員として防戦したが、否決された時の心の痛みは大きかつた。同僚の高木兼寛は、自己の経営する東京慈恵医院医学校の昇格が念頭にあるためか、一切沈黙を守り続けた。

(三) 明治医会の「医師会法案」

他方、勝利をおさめた入沢達吉等東大赤門派の反対同盟の人々は、神田小川町の顕微鏡院に集まり祝賀の会を持つた。更に反対同盟は「明治医会」と名を改め、日本の医学教育の改善に着手した。

明治医会の人々は独自の「明治医会の医師法案」を作つた。折しも、その草案に當つたのが、元済生学舎の教師であ

つた入沢達吉と田代義徳であり、泰の門弟で東大別科卒業の川上元治郎、及び泰と親交のあった山根正治もその主要なメンバーであった。

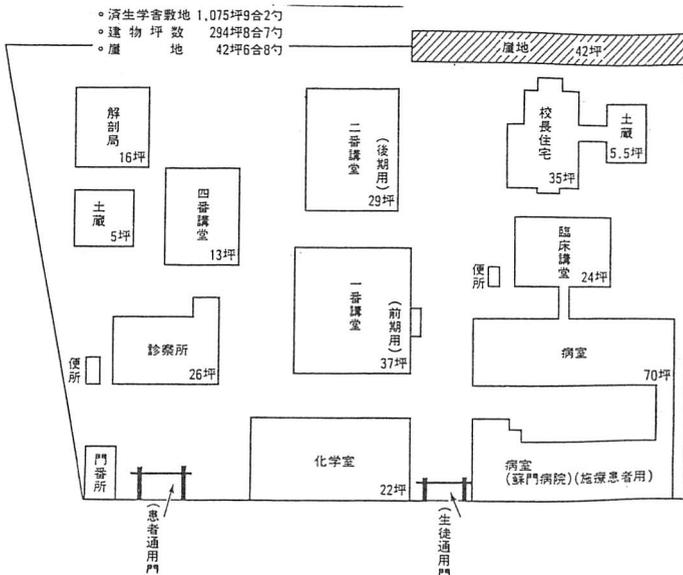
明治医学会の医師法案の草案では、日本の医学の向上のために、

一、「医術開業試験」は満五年後に全廃する事。

一、医師になるためには、帝国大学又は高等学校医学部を卒業するか、文部大臣の認可を得た公私立医学校の卒業試験に合格した人でなければならぬと明記した。

更に、中学卒業資格者の入学試験を求めた。その他、明治医学会は「医学教育の統一論」を唱え、医術開業試験制度を全廃して、私立医学校を認めず、官立の大学と専門学校の二階級とし、医学教育は是非学校教育に依らしめる事を協議した。また粗悪な私立医学校の撲滅を申し合わせた。

右の趣旨を受けて文部省では、秘密裡に高等教育會議が開かれ、明治三十二年から三十三年にかけて「専門学校令」の原案が練られた。



済生学舎敷地図 (明治20年)

〔四〕 廃校の直接的原因の「薬律改正問題」

医師会法案と相前後して、東京帝国大学薬学科出身の薬学者は、薬剤師の身分の保証と権利を求めて「薬律改正」(医、薬分業)を叫び政治運動を起こした。

かくて日本薬学調査委員会が明治三十二年に設置され、薬種商の店頭に並ぶ医薬品を調査した。ところが不良薬品が多数発見された。

そこで薬学者は、「医薬品は薬剤師に限り、販売・取扱う事」を立案化し、従来の法律を改める「薬律改正案」を中央衛生会に提議した。中央衛生会では医系の三宅秀・中浜東一郎委員が、薬学者の長井長義・丹羽敬三等と共に衛生局長の長谷川泰に改正を迫った。

中央衛生会委員を兼任する長谷川泰は、当時の国情から医薬分業は未だ熟していない事。全国二千五百人の少数の薬剤師では約四万人の医師の調剤は無理であること。全国二千二百の薬種商の営業を失なわせしめる事等を理由に独り反対した。更に衛生局長として国会に「薬律改正案」の提出を出ししづつた。ようやく明治三十五年一月国会の審議となったが、会期が尽きて改正案は握り潰しとなった。

明治三十五年三月、審議中の薬局方調査委員(医系・薬系)の辞職という紛擾が起こった。内務大臣の内海忠勝は苦慮した。その結果、委員を慰留するため、同年七月十六日突然長谷川泰は局方調査会長の職を免ぜられた。

他方内務省衛生局の内部でも、東大出身の技官が相次いで反旗を翻えた。技官柳下土興・血清薬院長高木友枝・技官宮入慶之助が辞任し、局内は朽に衰退類した。

総務長官の山県有朋は長年泰とは嫌悪の仲であった。内務大臣内海忠勝は好意的であったが、今は棧あらば泰の辞職を望むようになった。泰は五年間の在職中、百一法案を立法化したが、その功績も充分評価されなかった。明治三十五

年十月二十五日、泰は無念の思いで辞表を提出し、衛生局長の座を去った。

(五) 直接廃校の原因である「専門学校令」

済生学舎の専門学校昇格の準備は、校長の泰が衛生局長として多忙であったため大変遅れていた。

泰の辞任後五カ月にして勅令第六十一号として明治三十六年三月二十六日、「専門学校令」⁽¹⁾⁽²⁾が發布された。第四条に「公立又は私立の専門学校の設置廃止は文部大臣の許可を受くべし」とあり、文部大臣の認可制となった。その条文の附則の項に次の如く記してあった。「一、本令は明治三十六年四月一日より之を施行す。

一、既設の公立又は私立の学校にして、本令に依るべきものは本令施行の日より一、ケ年以内、第四条に準じ認可を申請すべし。前項の手續を為さざるものは、前項の期間満了と共に廃校したるものと看做す。

第一項の手續を為すも、不認可の命令を受けたるものは、其の命令を受けたる日に於て廃したるものと看做す。」
更に「専門学校資格標準」として(一)基本金、維持金は必ず確立する事。(二)学校及病院の収入を運用費に充てる様では不可である。(三)建物は煉瓦と木造とを問わず官立に劣らざる事。(四)学用患者は学生百人に対し三十人以上を有する事。

(五)創立者、講師は文部省の方針に充分適合する事等厳しい項目を指定した。

本令は済生学舎にとっては死活に関する重大な結果をもたらした。

『済生学舎医事新報』はこの法律に対して沈黙を守っている。

『医海時報』では五月に入り、「済生学舎では専門学校令により認可を要求すべしとは予て聞く所であるが、伝聞では本年中に閉鎖すべしとの事。而して長谷川泰は同所を引払い、某閑静の地に移り禅学三昧に日を送る決心なり」と報じている。

また同誌は東京慈恵医院医学校の認可申請を報じ、近く認可さるべしと記し、更に私立熊本医学校も同時に認可せら

るべしと聞く」と述べている。

その頃、苦境に陥った長谷川泰は色々昇格運動を行っている。先ず眞砂町十五番地の黴毒院跡地(註四)二千坪(明治二十二年に購入)に大学組織の学校を十八万円の費用で設立計画書を作った。泰の意向の中には、明治十七年三月文部省令第五十号により、「東京医学専門学校・済生学舎(註三)」として文部大臣東京府知事に申請し認可を得ている。今更専門学校と言うより、大学待遇を一気に望んでいた。

池田謙齋・芳川顕正を介して文部大臣菊池大麓に面会し、大学組織の学校の認可を相談したところ、「校舎を改善すれば専門学校に：」と大学組織を強く拒絶されている。また文部省専門学局長の松井広吉を訪問し、眞砂町の校舎の設計図を示して、大学待遇の医学校の認可を求めたところ、「専門学校資格標準」を示し、資本金、維持金の不足を理由に厳しく否定された。

迷える泰は親友の石黒忠恵(註五)を三度訪問している。石黒日記八月二十五日に「長谷川泰来る。廃校を勧む(註六)。」更に八月二十八日の項に「長谷川泰来る。廃校の事を語る」とある。石黒は泰に文部省が済生学舎の認可を強く行わない方針である事を告げ、廃校を勧めている。泰は熟慮の末、済生学舎の廃校を決心した。

泰は済生学舎の多年奉職した主な教師に廃校の手紙を書いた。外科学の丸茂文良宛書簡では、「二翰、拜啓、陳者今般私立法律学校同様、私立大学に改称の儀、当局者へ内請致居候処、許可不相成、趣就而は将来組織の維持は見込も無之候に付、来三十一日限り廃校仕候間、右様御了承被下度、尚委細者拝顔の上可申上候。 敬具。

明治三十六年八月二十九日

済生学舎舎長 長谷川泰(註六)

丸茂文良殿

と書かれ、書簡として丸茂家に保存されている。

(六) 済生学舎廃校宣言の新聞広告

明治三十六年八月三十日・日曜日(四)の主要な新聞の広告欄に泰の長文の廃校宣言が掲載された。

「済生学舎廃校の理由に付広告」

「済生学舎は本月三十一日限り廃校せり。

理由左の如し。

一、私立医科大学と改称すること行われず。

二、普通の医学専門学校として今後、維持す可き必要なし(以下略)

右の理由により本月三十一日限り、断然廃校せり。右広告す。

明治三十六年八月三十日 済生学舎」

(廃校までの二十八年間に、二万余人の医学生が学び、其のうち医師免許を得た者は一万人以上と言われ、明治三十九年五月、医師法が制定され各地に任意団体の医師会が出来た時、それ等の幹部の大部分は済生学舎出身で占められたといわれるほど、多くの医師を輩出した。)

他方、夏休みを終えて上京した済生学舎(三)の学生七百余人は、寝耳に水と驚き、東奔西走した。長谷川泰の政治力を信賴していただけにその悲しみは大きかった。

学生の園田重徳・鈴木寿一・篠田稷・鳥羽廉平の四名は協議の上「謹みて済生学舎生徒諸君に告ぐ」の檄文を書き、「同窓医学講習会」に参加するよう呼びかけた。

旧講師の石川清忠・曲淵景章・竹崎季薫・飯盛挺造等は同窓医学講習会の教師を快く引き受けて講義を続ける事になった。

外科学講師の丸茂文良は、自分の病院内に「医学温習会」を開き講義を続けた。

泰に恩顧を受けた桂秀馬（外科学講師）と川上元治郎（日本医事週報社主）の二人は神田の医師倶楽部^{クラブ}を借りて「医学研究会」を主催し、旧済生学舎の学生の救済にあたった。

明治三十七年、日露戦争が起り、急に軍医不足となり、文部省は専門学校令に添わなくても私立医学校を認可した。

そこで、同年春石川清忠は「私立東京医学校」を、山根正次は「日本医学校」を興し、済生学舎の学生を収容して教育を続けた。

明治四十三年、両校は専門学校となるため協議して合併し、紆余曲折の末、今日の日本医科大学へと発展した。

以上が済生学舎廃校の遠因及び直接的原因であり、廃校前後の経過である。

(七) 結 語

長谷川泰の経営する済生学舎は、明治九年より三十六年八月末までの二十八年間に、二万五千人余の学生に医学を講じ、九千人とも一万人とも言われる医師を養成した。

その中には野口英世・吉岡弥生・光田健輔・小口忠太・浅川範彦・須藤憲三等多くの医学者が含まれている。その功績は極めて大きい。

その済生学舎が廃校になった理由は左の如くである。

一、長谷川泰は常日頃から反権力主義的言動が多く、東大赤門派閥及び文部省の感情を次々と刺激する事が多かった。

二、「医学教育」の理念において、東京帝国大学を卒業してドイツに留学を果した東大の教授達と長谷川泰との間に、大きな相違があった。

三、右の医育上の問題をめぐり、「医師会法案事件」「薬律改正問題」等政治的論争が起こり、長谷川泰は破れ、内務省

衛生局長の座を去った。

四、勝利をおさめた東大赤門派閥と文部省は協議の上で「専門学校令」を明治三十六年三月に発布し、済生学舎の存在を不可能にした。

苦悩した長谷川泰は、石黒忠恵を三度訪問す。済生学舎の廃校を勧められ、終に「廃校宣言」を出した。

五、旧済生学舎の学生七百余名と教師は種々の講習会をもち、紆余曲折の末、今日の日本医科大学へと発展した。右の如く済生学舎の廃校を分析し、解明したので報告する。

〈謝辞〉

この研究につき、貴重な史料を提供していただいた諸先生及び東京都公文書館、日本医科大学図書館の皆様にご感謝の意を表します。

文献

- (一) 塩田広重「メスと鉄」七六〜七七頁、桃源社、東京、昭和三十八年
- (二) 宮島幹之助「北里柴三郎伝」一六四〜一六九頁、北里研究所、東京、昭和七年
- (三) 「京都大学七十年史」一四一―一八頁、京都大学、京都、昭和四十二年
- (四) 神谷昭典「日本近代医学の定律、私立医学校済生学舎の興廃」一〜五頁、二〇三〜二三五頁、医療図書出版、東京、昭和五十九年
- (五) 入沢内科同窓会「入沢先生の演説と文章」一二四三頁、五〇一―五六一頁、克誠堂書店東京、昭和七年
- (六) 「伝染病研究所建議案」『第四帝國議會、衆議院議事速記録』第二十四号、五九四―六〇二頁、明治三十六年一月十一日
- (七) 「関西に帝國大学設立案」『衆議院第一回通常議會速記録』第四十九号、七七五〜七八〇頁、明治二十四年二月二十日
- (八) 「医師会法案」『第十三回帝國議會、貴族院議事速記録』第一九号、二四〇〜二五三頁、明治三十二年一月五日

- (九) 「医師会法案」『国家医学雑誌』一四二号五一〜八二頁、明治三十二年三月
- (一〇) 「明治医会の医師会法案」『国家医学雑誌』一四九号、三六〜四〇頁、明治三十二年九月
- (一一) 「大日本医会第一回報告」明治二十七年一月（筆者蔵）
- (一二) 「大日本医会第五回報告」（明治三十一年）筆者蔵
- (一三) 谷岡忠一「日本薬剤師会史」九〇―一九三頁日本薬剤師会、東京、昭和四十八年
- (一四) 宗田一「図説・日本医療文化史」四三一―四三三頁、思文閣出版、平成元年
- (一五) 日本医科大学同窓会「心の母校・済生学舎小史」八二〜九八頁、日本医科大学同窓会昭和六十一年
- (一六) 「専門学校令」『東京医事新誌』一三〇二号四二〜四三頁、明治三十六年四月十日
- (一七) 山崎董「肥後医育史」五八四―五八八頁、鎮西医海時報社、昭和四年
- (一八) 「専門学校令による済生学舎」『医海時報』四六七号、明治三十六年五月二十日
- (一九) 「専門学校資格標準」『医海時報』四八九号、明治三十六年十月二十四日
- (二〇) 「石黒忠憲日記」明治三十六年八月二十五日〜九月五日まで（大幸重子様蔵）
- (二一) 「石黒忠憲談話」『東京医事新誌』一三二四号、明治三十六年九月十日
- (二二) 「東京医学専門学校・済生学舎申請書」東京府知事芳川顕正宛、長谷川泰（東京都公文書館蔵・回議録、六一四―C₅―4）、明治十七年三月二十四日
- (二三) 「長谷川泰の丸茂文良宛書簡」明治三十六年八月二十九日（丸茂文彦先生蔵）
- (二四) 「済生学舎廃校の広告」『東京日日新聞』明治三十六年八月三十日
- (二五) 「済生学舎廃校」『医海時報』四八二号

（日本医科大学）

The History of the Closing of a Private Medical School “Saisei Gakusha”

by Nobuyasu KARASAWA

The present article gives a history of Saisei-Gakusha, a private school of medicine founded by Dr. Tai Hasegawa in 1876 (the 9th Year of Meiji). It contributed greatly to the progress of medicine in Japan, producing distinguished graduates such as Drs. Hideyo Noguchi and Yayoi Yoshioka. There occurred later, however, a conflict between a group of doctors (Dr. Hasegawa among them) and the elitist professors at the School of Medicine of the University of Tokyo. Recurrent controversies between the two camps concerning issues such as the Bill of the Association of Medical Doctors, the Bill of Pharmacy, the Act of Professional Schools, and such, resulted in the prevalence of the latter over the former and ultimately the closure of the Saisei-Gakusha School of Medicine.